

PBeM『VOiCE』第1回リアクション

01-D 二月になれば彼女は

●小さな魔女のおまじない

これは、昔々のおまじない。

病気になってしまったあの人を、病室から救い出すおまじない。

古い建物には、人と歴史の力が宿る。その力を大地に咲く花へ宿して贈りましょう。

種から根が出て、双葉が芽生えて、そして花が咲くように、あの人もきっと元気になるでしょう。

これは、昔々のおまじない。

小さな魔女が、今に伝えるおまじない。

♪ Chocolate Disco

——はるか昔、二月一四日はすべての神の女王ユーノーの祝日だった。

翌日の一五日は、豊年を祈願するルペルカーリア祭が始まる日の始まる日であった。ルペルカーリア祭の前日——すなわち二月一四日——、娘たちは紙に名前を書いた札を桶の中に入れ、朝が来ると男たちは桶から札を一枚ひいた。ひいた男と札の名の娘は、祭りの間パートナーとして一緒にいることと定められていた。多くのパートナーたちはそのまま恋に落ち、そして結婚した。このルペルカーリア祭こそが、バレンタインデーの起源であるともいわれている。

ローマ帝国皇帝クラウディウス二世は、戦争中の兵士の士気低下を防ぐため、ローマでの兵士の婚姻を禁止していたという。当時のキリスト教司祭ウァレンティヌスは皇帝の命令に逆らい、兵士を結婚させたため捕らえられ、処刑された。処刑の日、すべての神の女王ユーノーの祝日であり、ルペルカーリア祭の前日である二月一四日があえて選ばれた。この日はキリスト教の祭日となり、恋人たちの日とされた。——

「ヴィヴィアン先生、この本に出てくる『ローマ帝国』って何でしょうか？」

図書委員のシュリー・ジルカは読んでいた本——というものの、電子データである——の一文を指して、隣で作業をしていた司書ヴィヴィアン・フェイに話しかけた。本当に知りたいと思うなら、そのまま検索すればいいのだが、あえてシュリーはそれをしなかった——知りたいのではなく、話したいのだから。

ヴィヴィアンは、新着データを図書室のデータベースに登録する手を止め、シュリーに答える。

「遠い遠い昔、それはもうとてつもなく大昔にあった、古い大きな国のことすわ」

「ふたつの丘や、他の街を合わせても、ずっと大きいんですの？」

シュリーは首をかしげた——そんな大きさ、想像もつかない。

「ええ、そう言われていますわね。わたくしたちは、もう書籍データの中でしかローマ帝国を知ることではできませんけど……そこで生きていた人も、息づいていた思いも文化も、わたくしたちに確かに受け継がれているはずすわ。丘ふたつを巡る防塞を設けただけの小さな村が、やがて帝国と呼ばれるほどになったように、シュリーさんたちも大きく街を育てていくことでしょうね」

そう言って、ヴィヴィアンは微笑んだ。

二月一四日、バレンタインデー。

チョコレートを送り、愛を告白する日。

辻風麻里子は、その日に向けて、今から準備に余念がない。

どんなラッピングがいいかな、甘いもの嫌いじゃないかな、喜んでくれるかな、受け取ってくれるかな——さまざまな思いと悩みは、尽きることはない。

それ自体は、流通業界や製菓業界が販売促進のために定着させた文化だとしても、チョコレートに託された想いに偽りはない。

少女たちは甘いチョコレートに、自分の心を包み込む——届きますように、伝わりますように、叶いますように、と。

♪ 計算する女の子 期待してる男の子

冬の教室を、朝の日差しが静かに柔らかく照らす。まだ生徒の姿は少ないが、あと十分もすれば登校してきた子どもたちの声で賑やかになることだろう。

ジャンヌ・ツェペリが教室に着くと、クラスメートの陳宝花はいったい何があったのか、ずいぶんと機嫌が悪いようだった。挨拶もそこそこに、席替えて隣になったばかりの片岡春希を相手に、まくし立てている。

「挨拶しないのはよくない！ ニアはそういうところ直さないと、絶対ソソる！ 春希もそう思うよネ？」

「うん、そうだねえ……ニアちゃん、なんか怖い感じがするし……」

春希がやんわりと頷く。

「おはよう、メンマ、草食系」

「言っておくけどネ、メンマって呼ぶ限り、宝花は返事をし

ないゾ」

実に堂々とした態度で挨拶してきたクラウド・トレスに、宝花は胸を張って宣言する。

「言っている意味がよく分からないな。草食系、分かるか？」

「あの、ごめんね、草食系って何？」

クラウドは呆れたといわんばかりに、大げさに肩をすくめて嘆いてみせる。

「今、この俺の目の前にいるのが、草食系でないなら、いったい誰だというんだ？」

「え、うん、誰だろう……？」

「まったく……ああ、魔女もいたのか。おはよう、魔女」

魔女と呼ばれたジャンヌは首をかしげて、くすくす笑う。

「その名前と呼ばれるの、意外と悪い気はしないかも」

魔女——生と死の境界線、その垣根の上にいる女。古くから伝わるその呼び名は、いまの時代にはもう似つかわしくないのかもしれない。もはや古い物語の中でしか見かけられないような言葉だ。だが、ジャンヌの耳には心地よく響いた。

「いいや、悪いゾ。ジャンヌにはジャンヌっていう、ちゃんとした名前が……」

「メンマ、そうやっていちいち人の感性に難癖をつけるのは良くないな。魔女は魔女、メンマはメンマ、草食系は草食系。みんな違って、みんないい」

クラウドがどこかで聞いたようなことを言いながら、哀れむように頭を振る。

「宝花は宝花ッ！ メンマは食べ物ッ！」

その様子を小さな魔女ジャンヌは微笑みながら眺める。

少女たちは、来るべき二月一四日を思ってそわそわし始めている——さあ、そろそろ魔女の出番だ。

♪ときめいてる女の子 気にしないふり男の子

放課後の図書室は、子どもたちの声で意外と騒がしい。

本を借りに来る者、返しに来る者、ただなんとなく図書室にふらりを訪れる者、司書のヴィヴィアンとの会話を楽しむ者——さまざまな理由で、さまざまな子どもたちが訪れる。保健室とはやや趣は異なるものの、ここもまた子どもたちの心を受け止める場所なのだろう。

エルメル・イコネンも、また図書室を訪れる子どもの一人だ。

机の上の花瓶に花を活けているヴィヴィアンの隣では、同じクラスのシュリーが座って本を読んでいる。シュリーは教室では一人で本を読んでいることが多く、あまり会話にも混ざらない。だが、図書室だけは例外のようで、放課後はヴィヴィアンとよく話をしている。

歳の割に小柄なシュリーの長い銀髪が、夕日を受けて

赤く輝いているのを見て、エルメルはもう一人、銀髪の少女のことを思い出していた。ライサ・チュルコヴァ——シュリーが物静かなお人形だとしたら、ライサは活発なお人形といったところか。だが、活発なお人形もまた、あまり周囲の会話に混ざらないことが多い。放課後も、誰かと遊んだり、寄り道を楽しむこともなく、まっすぐ帰ってしまう。メッセージラインにも出てこないときは、積極的に話しかけにいかなければ、なかなか接点を持ちづらい少女だった。

そんなライサも、エルメル同様に本が好きなのだろうか、ほぼ毎日帰りぎわに図書室へ立ち寄る。後を追っているというわけでもないのだが、なんとなく同じ空間にすることが多いのだった。彼女はいつも一人で図書室へやってきていた。図書室の床に、彼女の影が伸びる。たった一人の、長い影をエルメルはよく見かける。エルメルにとっては、話しかけるタイミングや機会があるような、ないような、なんとも宙ぶらりんな状態だ。好きとも苦手ともいえない、なんとなく「気になる」という、名づけようもなければ、持って行き場もない気持ちを抱えて、エルメルは今日も本を選ぶ。とはいえ、初等教育クラス向けの本はあらかじめ読み尽くしてしまって、中等教育クラス向けの本に挑みつつあるのだが。

しかし、今日はどうやら一人ではないらしい。

「ライサちゃんが好きな本がいいなあ」

「はいはい、今選んであげるから」

会話の相手は、同じクラスの水無月千鳥だった。どうやら、ライサが千鳥に読む本を選んでやっているようだ。やがて、また同じクラスの佐久間花音がやってきて、二人に話しかけた。

「ライサちゃん、千鳥ちゃん、何しているの？」

「これね、わたし借りるんだあ」

花音が話しかけると、振り向いた千鳥が不意に抱きつく。しかし花音は驚いた様子もなく、平然としている。

「そう、それは良かったわ」

「うん！ あ、それでね、わたし、ライサちゃんにおすすめの本を教えてもらおうと思って」

「そうなの、どれを借りるか決まった？」

「うん！ これ、『わたしたちの社会のしくみ 上巻』っていうの。花音ちゃんも、本を借りに来たの？」

「ううん、花音はお誘いに来たの。良かったら、これから社会科見学のお菓子を買いに行かない？」

そう言って、花音はライサを見やる。ライサは、千鳥を見る。千鳥はライサと花音を見つめる。

「……断ったら、泣かれそうだよ」

「え？」

「なんでもないわ、こっちの話。いいわよ、千鳥も来るで

しょ?」

「うん!」

本の貸出手続を終えた千鳥とともに、ライサと花音は図書室を出ていった。

エルメルは三人がいた本棚へ近寄ると、そこに収まっている書籍のタイトルを眺める。『わたしたちの社会のしくみ』、『選挙ってなあに?』、『くらしをささえるもの』、『お金とはなにか』——ライサは何を思って、何を知らうとして、本を読んでいるのだろうか。

♪バレンタインが近づいて

「バレンタインのチョコレート、どうしようかな?」

社会科見学が終わると、そんな話題が学校のあちこちで出てくるようになる。他の子に差をつけたいけれど、どうしたらいいか分からない。お小遣いには限界があるし、何より買っている姿を誰かに見られたりしたら恥ずかしい。噂になったらどうしよう。バレンタインデーは少女たちにとって悩ましい行事のひとつだ。

そんな少女たちを救うべく、今ここにミシェーラ・ベネットは立ち上がった——というわけでもないが、ミシェーラにはある考えがあった。

昼休み、ミシェーラは図書室へ向かった。

「ヴィヴィアン先生、ちょっとお願いというか、相談事が……」

「あら、どうしました?」

図書室に併設された司書室でコーヒーを飲んでいたヴィヴィアンが、ミシェーラの声に顔を上げる。ミシェーラを司書室に招き入れると、空いていた椅子いすに座るよううなが促した。「あの、家庭科室を使わせてほしいんです」

「家庭科室……?」

ヴィヴィアンは、ミシェーラの胸についている認識票の色をちらりと確認する。

「ミシェーラさんの学年では、確かまだ家庭科の授業はないでしょう? 何をされるんですの?」

「あの、私、バレンタインデーのチョコ作り教室をやろうと思ってるんです。作り方とか分からない子もいるし、それに男子への義理チョコもまとめてみんなで作れるから」

「そうですわねえ……それでしたら、まずは家庭科の先生に使ってもいいかどうか確認しましょうか。でも、どうしてわたくしに? 担任のジェフリーズ先生は?」

担任の名を不意に出されて、ミシェーラは一瞬答えに悩んでしまう。

「えっ……と、その、ローマン先生も男子だから、こういうの、その、ちょっと」

ボブカットの髪の毛先をしきりにいじりながら、ミシェー

ラは答えた。ヴィヴィアンはその様をじっと見つめていたが、やがて柔らかく微笑んで頷いた。

「分かりましたわ、わたくしもささやかながらお手伝いいたします」

ミシェーラと入れ違うように、シュリーも図書室を訪れた。教室にくらべると、はるかに静かだ。教室も好きだが、図書室はもっと好きだ。もはや指定席ともいえる、司書室に一番近い席に座ると、シュリーは目でヴィヴィアンを探す。すると、タイミングよく、ヴィヴィアンが司書室から出てきた。「ヴィヴィアン先生、こんにちは」

ぺこりと頭を下げて挨拶をすると、ヴィヴィアンも挨拶を返してくる。

「ごきげんよう、シュリーさん。今日は何の本を読んでらっしゃるの?」

「今日は、これですの。『赤い王子と黒い姫君』、七人の王子様が七人のお姫様を助けに行く話ですわ」

「まあ、素敵なお話ですね」

普段は歴史関係の本を読むことも多いシュリーだが、やはり女の子が好むような、王子様がお姫様を助けに行くような物語をよく読んでいる。特に今頃のように、バレンタインデーも近づいてきて、恋やらチョコやらの話題を耳にすることも増えてくると、少なからず影響されているのだろうか、その手の話が読みたくなるのだ。

「先生は、バレンタインデーはどうなさるの? 誰かにあげたりしませんの?」

「あら、そういうシュリーさんは? いい人はいらっしゃるのかしら?」

そう返して、ヴィヴィアンはくすくす笑う。生徒と教師というより、同じ年頃か、あるいは年の近い友人同士のように接してくれる。たとえ相手が入学したての幼年教育クラスの子どもであっても、ヴィヴィアンは丁寧な口調を崩さない。本を愛する司書教諭にとって、本の前では、人間はすべて対等の存在らしい。

「わ、わたしは……まだ、そういうのは、よく、分からなくて」

気恥ずかしそうに、だごまかしもせず、素直に答えるシュリーにヴィヴィアンは優しい笑顔を見せた。

「いつか必ず、シュリーさんにもチョコレートを贈りたくなるような王子様が現れますわ。ヴィヴィアンの勘はよく当たりますのよ」

そう言って、いたづら悪戯っぽくウィンクしてみせた。

♪デパートの地下も揺れる

胸のサイズを示すのに、ブラジャーのカップサイズがよく使われるが、十歳ともなれば、その辺の知識も次第に身

につき始める。甘いフリルやレースの飾りに、夢を見始める年頃ともいえるだろう。とはいえ、やはりまだブラジャーが必要な状態ではない少女の方が多い。いわゆるひとつの、つるん・ぺたん・すどん、である。だが、規格外というものは、いかなる時、いかなる場所に存在しうるものである。

カップが大きければすなわち巨乳といえるほど、単純な世界ではないのが女子の胸だ。カップサイズを示すアルファベットの後にくる数字は、アンダーバスト——要は身長測定でいうところの胸囲なのだから、この部分の数字が大きいかからといって、巨乳の証明にはなりえない。

しかし、^{よわい}年齢十歳にして、トップバストとアンダーバストの差が二〇cmもあれば、十分に巨乳と呼べるだろう。

イレギュラー——それは、島田ミズキのためにある言葉なのかもしれない。特に胸のために。

クラスの中でも数少ない、というかむしろ希少なブラジャーデビュー済みのミズキ (Eカップ) は、今日も明日も続く HENTAI ことルーチェ・ナゾからの攻勢をかいくぐると、隣の教室を訪れた。

ドアから中を覗くと、はたして目的の人物はそこにいた。

ふわふらきらきらの金髪をフリルたっぷりのリボンでゴージャスに結び上げた少女——自称「恋愛の導き手」フランセット・ドゥグルターニユだ。

違う教室に入るのはどうしても^{きおく}気後れするが、ミズキは思い切って足を踏み込んだ。フランセットの席まで行くと、話しかけた。

「隣のクラスの島田ミズキだけど……あなたとちょっと話したいことがあって」

フランセットはミズキの顔をしばし見つめたあと、微笑んで答えた。

「かまわないわよ。ここじゃない方がいいわよね」

そう言って、ミズキの先に立ち、さっさと歩いていってしまう。ミズキがその後を小走りに追いかけると、隣のクラスの男子から驚き混じりの歓声が上がった。

昇降口近くのベンチに腰かけると、フランセットはすつと足を組んだ。ラインストーン入りのブーツと、黒タイツの組み合わせが、妙に大人びて見える。

「ちょっと寒いけど、ここなら聞き耳は立てられないわ」

「そうね」

「で、お話は何かしら、ニュータイプさん？」

どこか挑発するような口調で、フランセットはミズキに尋ねる。いったい何が由来なのかはミズキも知らないが、なぜか「ニュータイプ」というのがミズキのあだ名だった。紳士淑女たらしとする者は、これを深く追及してはな

らない。(この物語はフィクションであり、登場する団体人物などの名称は宇宙世紀とは関係ありませんが、1stとIGLOOが好きです)

「分かってるでしょ？ 二月四日のお話よ」

「ふふ、ストレートねえ。いいわ、アドバイスしてあげる。この、恋愛の導き手フランセット・ドゥグルターニユがね」
「同じクラスの男子にチョコを上げようと思うんだけど、どういう渡し方がいいかと思って。あなたに聞いておけば、百人力かと思うの。まあ、実際のところ、そんなにすぐく本命ってわけじゃないから、あまり本気になられても困るところではあるのよね」

「まあね、その辺のコントロールはちゃんとしておかないと、あとで^{やつかい}厄介ごとになりかねないしね。ところで、誰に渡すのか聞いてもいいかしら」

「ルーチェ」

「HENTAIに渡すとは……あなたも相当なものね」

「だってほら、顔はいいから」

「まあねー」

納得したのか、フランセットは考えこむ。

「そうね……ああ見えて、自分だけに向けられた好意には弱いと思うわ。なにせ HENTAI だからね。いくらイケメン的な意味で将来は有望そうといっても、今がアレだし、女子からはそんなに好かれてるわけじゃないもの。机に入れておくのがいいんじゃないかしら。下手に直接手渡すると調子に乗りそうだし。可愛いラッピングで、ハートの形の飾りとメッセージをつけておけばいいと思うわ」

「ふうん、なるほどね。分かったわ、ありがとう」

「どうってことないわ。相手のことと、あなたの気持ちを包み隠さず話してもらえれば、恋愛の導き手には簡単な話よ」
「……ねえ、これからもたびたび、話をしてもいいかしら？」

ミズキが問うと、フランセットは笑顔で頷いた。

「いいわよ、いつでもいらっしやい」

●小さな魔女のおまじない

これは、昔々のおまじない。

星に願いを託すおまじない。

クッキーを星になぞらえて、チョコレートをあの人に見立てて、そっと載せれば、星があなたの想いをあの人に届けてくれるでしょう。

流れ星が流れていくように、あなたの想いはあの人の中にきっと届くでしょう。

これは、昔々のおまじない。

大切な人を元気づけるおまじない。

四角形は物事の安定を表す。だから、あの人に贈るチョコ

コレートにそっと四角いクッキーを載せれば、あの人の身も心も安定させてくれるでしょう。

元気がないあの人が元気になってくれますように——四角いクッキーはあなたの願いを叶えるでしょう。

♪お願い 想いが届くようにね

二月一三日の夕方、学校の家庭科室に少女たちが集まっていた。そこには、珍しくヴィヴィアン・フェイの姿もある。ミシェーラが家庭科室の使用許可をもらう際に、当日の監督役を買って出てくれたのだ。

明日のためのチョコレートを作り、クラスの男子に配るという名目上、当然のことながら男子厳禁だ。何をすることも秘密だ。

「なーなー、何やるの？」

放課後、気もそぞろな少女たちに混じって家庭科室へ向かう平谷杏樹に、ルーチェが尋ねる。

「うーん、秘密だもん。言えない」

なぜか猫の耳を模したカチューシャをつけた杏樹は、腕で大きく×を作ると、ルーチェを置いて走っていく。

「なんだよー、つまんねーなあ」

一人残されたルーチェは、仕方なく次の標的を探しに教室を出ていった。

「えっと、まずはチョコレートを細かく刻んでくださーい」

発起人のミシェーラが声をかけると、少女たちは思い思いの手つきで作業を開始する。ミシェーラが持ってきたレシピだけでなく、それぞれが事前に調べてきたレシピにも挑戦するようだ。

「直接お湯に入れたらダメなんだよね？」

「もうチョコ入れちゃっていいのかなあ」

「わ、わ、あつという間に溶けた！」

「わあ、すごい、いい匂いー！」

作業のひとつひとつに、歓声が上がると、ヴィヴィアンはそれぞれのテーブルを周り、時々手伝いやアドバイスをしている。

参加者のひとりである麻里子は、マシュマロチョコに挑戦していた。湯煎で溶かしたチョコレートをマシュマロにつけ、固まらないうちにアラザンやカラーチョコスプレーをトッピングするというものだが、慣れないうちは形よくチョコをつけるのが難しい。しかし、やがて慣れてくると、あつという間に量産できる。見た目も可愛らしいし、質より量な義理チョコには最適だった。

「ねえねえ、魔女のおまじないって知ってる？」

作業をしながら、誰かが不意に魔女の名を口にすると、

「知ってる知ってる！ 星のクッキーを使うんだよね」

「わたし、星型クッキー買ってきちゃった」

「えー、誰に渡すの？」

「秘密ー、言えないよー」

くすくす笑う少女たちは、義理チョコ量産が終わると、今度は丁寧かつ真剣にチョコレートを溶かし始める。

ミシェーラは、レシピに書かれた分量と手順を確認しながら、ミニトリュフに挑戦する。一口大のトリュフをカップに入れてラッピングまでやるのが、今日の目標だ。

細かく砕いたビスケットに生クリーム——植物由来の成分なので、正確にはクリームとは呼べないのだが——を混ぜあわせ、さらに溶かしたチョコレートを入れて練り合わせる。あとはこれを手で形よく丸めるだけだ。ひとつひとつ真剣に、受け取ってもらえる風景を思い浮かべながら、ミシェーラはまだほんのり温かいチョコレートを手に取った。

日は沈みきり、星が瞬き始める頃、少女たちを見守っていたヴィヴィアンが職員室に帰ると、どこか心配そうにローマンが尋ねてくる。

「すみません、生徒たちが面倒をおかけしませんでしたか？」

「かまいませんわ、片付けもきちんとできましたし、とっても良い子たちですわね。何よりわたくしも楽しめましたもの」

「そうですか、それならいいんですが」

「明日はジェフリーズ先生も貰えるといいですわね、チョコレート」

「ははは……まあ、期待はしないでおきます」

「期待だけなら、誰でもしていいと思いますわよ？」

「……えぐってきますねえ」

♪とっても心こめた甘いの

野中永菜は、放課後になると、一直線にティベリス通りにあるアピントン・スウィーツ&キャンディへ向かった。そして、一口サイズのチョコレートが入った透明ボトルを指さして、店員に言った。

「これ、ください」

「はい、ありがとう。一個から買えるけど、いくつ欲しいかな？」

ボトルのふたを開けながら、店員が個数を確認しようとするので、永菜は首を横に振った。

「いくつとか、そういうのではないのです」

「はア？ あ、いや、これは失礼。えっと……？」

「これ、です」

そう言って、再びボトルを指さす。

「これ、まるごと、ひとつ。です」

永菜はきっぱり言い切った。

♪対決の日がきた

二月一四日、快晴。

朝から学校中が、なんだかさわさわわしている。

女子は男子の様子を伺い、男子もまた女子の様子を伺う。昼休みか、それとも放課後か、決戦はいつになるのだろう——そればかりを考えながら。

麻里子は昨日作ったチョコレートをそっとバッグに忍ばせて登校した。

——誰に渡そうかな。ううん、誰に渡すことになるのかしら。

麻里子は今日現れるかもしれない白馬の王子様に、想いを馳せる。

今日はバレンタインデーだ。きっと王子様は現れる。

恋に恋する少女は、チョコレートを持ち歩きながら、やってくるだろう運命を待ち構える。

運命はきっと麻里子の心のドアを叩く。そうしたら、麻里子は笑顔でドアを開け、王子様という名の運命を迎えるのだ——

浮き足立った一日は、授業が終わってもまだまだ終わらない。むしろ放課後こそが決戦だろう。

ルーチェが、昼休みに春希がもらったというチョコレートを遠慮なしにもぐもぐ食べながら、机の中に何気なしに手を突っ込むと、何かが入っていた。

「なんだあ？」

そっと引っ張り出してみると、それはピンクの包装に包まれた小さな箱だった。リボンにはハート型のメッセージカードが挟まれている。

「こ、こ、」

「どうしたの、ルーチェくん。チョコおいしい？」

同じようにもぐもぐとチョコレートを食べている——強奪されること自体はもはや慣れているらしい——春希が尋ねる。

「な、こ、うん。うまい」

春希が気づいていないのを幸いに、ルーチェは何事もなかったかのように箱を机の奥に押し込んだ。

チョコだ。

まぎれもなくチョコだ。

今日は二月一四日だ。

つまり、そういうことだ。

ルーチェは口の中のチョコレートを飲み込むと、春希に気づかれぬように箱をバッグにしまう方法を考え始めた。

永菜は、大きな袋を抱えて廊下を走っていた。先生に注意されたような気もするが、きっと気のせいだろう。今

はそれどころではないし、何より重大な使命を持って走っているのだから。

きよろきよろと周りを見回しながら、たまに人にぶつかりながら、永菜は目当ての人物を探して回る。幸せの青い鳥はすぐ身近にいたように、永菜の探し人も結局は教室にいた。

「いた！」

ぜいぜいと肩で息をしながら、永菜は教室にいたルーチェを指さす。

「見つけました！」

「えっ」

「何？」

どこかへ走っていったと思いきや、教室に戻ってくるなり大声を出す永菜を、ルーチェと春希は呆気に取られたように見やった。

「なんだよ、どっか行ったかと思ったら」

ルーチェの言葉に永菜は答えない。抱えていた袋をどんとルーチェの目の前に置くと、永菜は息を整えてから言った。「誰かのチョコレートを食べるなんて、悪いことです！」

ちらりと春希を見る。ぽうぜんとしているのは、きっとチョコレートを食べられてしまったからだ。そうに違いない。ああ、なんということだろう、犠牲者が出てしまっていたとは……それならば、犠牲は最小限に留めるべきだ。永菜はともすれば落ち込んでしまいそうな気持ちを奮い立たせて、ルーチェに言った。

「だから、たくさん買ってきました！」

「は？」

神聖なるバレンタインデーに、他人に贈られたチョコレートを食べてしまうなんて！——隣のクラスのフランセットが言っていた下馬評とやらを耳にした時、愕然としたのを今でもはっきりと覚えている。そこで、永菜は考えたのだ。誰かのチョコレートを食べてしまう前に、たくさんチョコレートを食べさせてしまえば、被害者は出ないだろうと。

永菜が抱えていた袋の中には、一口大のチョコレートが詰まっている。永菜がお小遣いを貯めて、いわゆる大人買いをしたのは、このためなのだ。買う瞬間は、なんだか爽快だった。

「さあ、このチョコレートを食べてください！」

「食べてくださいって」

「なんか斬新な言い回しに聞こえるね」

思わず顔を見合わせるルーチェと春希だったが、すぐに気を取り直す。

「まあ、でもくれるなら、ありがたく。いただきまー、」

——その瞬間、躍り出た影がふたつ。

「悪い子はいねがー！」

ビニール袋を細く割いて作ったらしいマント状の何かと、お面をかぶった何者かが、机の上の袋に手を伸ばそうとしていたルーチェの脳天にチョップを食らわせた。

「今日はなあ、元々チョコの日でもカップルの日でもねえんだよストコドッコイ！」

左手にサンタクロースのパペット人形をはめた、細身でやや背の高い何者かが、勢い良くツッコむ。

何が起きたのか、とっさに理解できず、呆然とその光景を見守ることしかできない永菜と春希に、何者かが言った。「そういうのはクリスマスのうちにやれ！」

「あ、はい」

ほぼ反射的に春希は頷いた。

「誰かと思ったら……ニコラスさん」

永菜は、目の前のサンタクロースのパペット人形——ニコラスに言った。

「いけません。ここでルーチェさんにチョコレートを食べさせないと、かわいそうな被害者が増えてしまうのです！」

「はあ？ 何言ってるんだ。それを言ったら、クリスマスだってかわいそうだろう！」

「え、なんでここでクリスマス？」

「だいたいなあ、クリスマスは冬休みだからでスルーされ気味だったのに、バレンタインばかり盛り上がったら、クリスマスがかわいそうだろう！ そう思わないのか？」

永菜と春希はしみじみとニコラスを眺める。ああ、そういえば、ニコラスはサンタクロースじゃないか。

「ごめんね、ニコラス」

「ごめんなさい」

謝る二人に、お面をかぶった何者かが叫ぶ。

「違う！ チョコレートは猫には毒なのだ！」

「えっ、そうなんだ。あげちゃだめなんだね」

素直に驚く春希に、お面少年（仮称）は深く頷いた。

「そうだ！ あげてはいけない！ ぼくチョコレートが嫌いだし！」

「白猫～、今の痛かったぞ」

チョップから回復したルーチェが、お面少年（仮称）改め白猫（あだ名）のお面を指でぺしんと弾きながら言う。
ゴッドファーザー
名付け親はクラウドオだ。

「いいじゃん、チョコうまいし」

「うまくないっ！」

「あ、いたいたー」

「これでノルマ達成ね」

ドアが開く音とともに、そんな会話が七人（ニコラス含む）

の耳に届いた。

「あれ、ミシェーラさんとジャンヌさん、どうしたんですか？」

永菜が教室に入ってきた二人——ミシェーラとジャンヌに話しかける。

「あたしとミシェーラと二人で、義理チョコ配布の旅をしていたの。あなたたちが見つかったから、ここが終着点」

「なんか切なくなるような旅なんだけど……」

春希の^{つぶや}呟きに気を留めることもなく、ミシェーラとジャンヌは抱えていた袋から義理チョコの箱を取り出した。

「はい、HENTAIの分。存分にありがたがって食べてね」

麻里子が作ったマシュマロチョコを、二人の少女は手渡していく。

「春希くんはお昼休みにあげたけど……いいわ、せっかくだからあげる」

「わあ、いいの？ ありがとう」

「春希ばかりずるいぞー」

「だから、ルーチェさんは春希さんのチョコじゃなくて、こっちを食べてください！」

「白猫にもあるわよ」

ジャンヌがそう言って箱を渡そうとすると、白猫は頭をぶんぶん振って拒否してみせる。

「いらない！ チョコレートは嫌いだ！ あとガミガミ言う女子も嫌い！」

「勢いにまかせて、何をさらっと言ってるのよ……。まあ、あたしもガミガミ女の^{くつわ}轡はぞっとするわね。これはチョコレートじゃないから安心しなさい。チョコ嫌いな白猫には、特別にクッキーにしておいてあげたから」

「もらう」

「早ッ!？」

ミシェーラは、ニコラスの手に箱をふたつ握らせた。

「はい、ニコラスの分もあるからね」

「……ありがとう」

そう言ったきり、ニコラスは黙ってしまった。

♪お願い 想いが届くといいな

教室での騒ぎが一段落し、帰るふりをしてジャンヌや永菜たちと別れたあと、ミシェーラは職員室を訪れていた。

「すみません、ローマン先生は……？」

たまたま報告書の提出に来ていた保健医の^{よるぶちしき}夜淵四季が、ミシェーラに気づいて答える。

「ジェフリーズさんだったら、確かさっき社会科準備室に行ったわよ」

「ありがとうございます！」

礼もそこそこに、ミシェーラは走りだした。四季はそれを見て、初恋って素敵よね、と言ったとか言わないとか。

社会科準備室の前へ行くと、ミシェーラは慌てて前髪を指で整える——いけない、走ってきたなんてバレないようにしなくちゃ。

ノックしようとするが、はたしてノックしていいものやら、逡巡しゆんじゆんしてしまう。行ったとは言われたが、まだいるとは限らないし、ああどうしよう？

「何をしているんだい？」

ミシェーラが悩んでいるうちに、ドアは開いてしまった。資料を取りに来たのだろうか、データカードを何枚か手に持っているローマンは、ミシェーラを不思議そうに見やる。

「あ、あの」

意を決して、ミシェーラは持っていた箱を目の前に差し出した。今日この瞬間のために、他のどのチョコレートの箱よりも丁寧に、一番可愛いと思った包装で、一番上手にできたチョコレートを入れてきたのだ。はにかみつつも、一番の笑顔で、ミシェーラはローマンに言った。

「あの……これ……もらってください」

♪ Chocolate Disco Disco

夕暮れ時ともなると、さすがにそわそわした雰囲気も落ち着いてきた。

麻里子はチョコレートをまだ持ったまま、ゆっくりと昇降口に向かって廊下を歩いていた。

バッグからそと取り出して、箱を眺める——けっこう上手にできたんだけどなあ。

せっかく作ったのにな、とバッグにしまいかけた、その瞬間だった。

「あっ、チョコレートだな！」

突然の声に驚いた麻里子は、思わず箱を落としかけたが——それをすかさずキャッチしたのは、サンタクロースのパペット人形。

「だから、そういうのはクリスマスにやれって言ってんだろ！」

「え？ え？」

見れば、そこにはクラスメートの左手で、ぱくぱくと激しく主張するサンタクロースのニコラスが箱を抱えていた。右手には、昨日家庭科室で見かけた箱が二つ。

「クリスマスがかわいそうだろ！ だからこれはもらっておいてやる！」

「えっ」

麻里子が呆気にとられているうちに、ニコラスはさっどこかへ行ってしまった。

「これも運命？ 王子様なの？」

二月一四日の夜、職員専用の昇降口でヴィヴィアンはローマンと居合わせた。

「生徒から貰っちゃいました」

聞かれてもいないのに、そう言ってミシェーラのチョコレートを見せる。ヴィヴィアンはそれを見て、我が事のように嬉しそうに微笑んだ。

「まあ、お赤飯ですわね」

「いやそれ違うし」

●ねえ ねえ ねえ ねえ 今日はどこへ行こうかな？

妙に気ぜわしかった二月も終わりが近づいてきた。

来月の行事に向けての全体会議を終えて、ローマンは保健医のベネディクト・ハンゼルカとともに、職員専用の昇降口へ歩いていった。

「合唱祭と自由研究発表会と、行事が続くからね。担任クラスがある人は大変だなあ」

気楽そうな口調のベネディクトに対して、ローマンは少し悩ましそうだった。

「まあ、うちのクラスはしっかりしてるから、大丈夫だとは思うけどね」

「おやおや、自信ありそうだね、先生」

「ただ合唱祭はなあ……音楽や歌が苦手な子が多くて。理科や社会が得意な子は多いから、自由研究発表会は心配ないんだけど。それこそ、文字通り自由にやらせてみようかと思うんだ」

「で、どう？ ウチの味！」

宝花は、期待に満ちた目で春希を見つめる。

春希が食べているのは、宝花の家が営む中華料理店「宝花」のラーメンだった。

「うん、すっごくおいしい！」

「たくさん食べていってくれな！」

春希が答えると、厨房から威勢のいい声も飛んでくる。

「じゃあ、食べ終わったら自由研究発表会の打ち合わせネ！」

「うん、一緒にがんばろうね」

生まれて初めて女の子の家に来て、ラーメンをごちそうになっているという事態にどきどきしながら、春希は頷いた。

登場 PC・NPC一覧

【PC】

- ・島田ミズキ
- ・辻風麻里子
- ・ミシェーラ・ベネット
- ・エルメル・イコネン
- ・シュリー・ジルカ
- ・クラウディオ・トーレス
- ・野中永菜
- ・ジャンヌ・ツェペリ
- ・白戸さざり
- ・天野ひいらぎ

【なにげに登場 PC】

- ・陳宝花
- ・水無月千鳥
- ・佐久間花音

【NPC】

- ・ルーチェ・ナーゾ
- ・ライサ・チュルコヴァ
- ・ローマン・ジェフリーズ
- ・フランセット・ドゥグルターニュ
- ・ヴィヴィアン・フェイ

【ちょっとだけ登場 NPC】

- ・片岡春希
- ・夜淵四季
- ・ベネディクト・ハンゼルカ